

(教職教育研究図書コーナー)

中等学校史誌コレクションについて

佐々木 享

名古屋大学図書館に収蔵されている2000冊近い中等学校史誌コレクションについて、当初からこれらの収集に携わった者として、若干の説明をしておく。このコレクションの主要なものは(新制)高等学校の学校史・記念誌の類で、当事者としていうのもおこがましいが、日本では有数のものの一つである。

「中等学校史誌コレクション」なる呼称には、いくらか説明が必要である。まずこのコレクションは、第二次大戦後に創設された高等学校の学校史・記念誌に限られるわけではない。今日の少なからぬ高等学校は、旧学制のもとで中等学校といわれた中学校、高等女学校あるいは実業学校(工業学校、商業学校、農業学校など)を前身校としている。そのため、(新制)高等学校の学校史は、最も歴史の古い学校でも2002年の今日で発足後54年しか経過していないはずなのに、その前身校の歴史を包括して述べているために、70年史とか100年史などと銘打ったものが少なくない。別の面からいえば、この「中等学校史誌コレクション」は旧制の中学校、高等女学校あるいは実業学校を包括していると考えてよい。

他方この「コレクション」には、旧制の高等学校の学校史・記念誌はふくまれていない。教育研究者の一部には、旧制の高等学校の教育を後期中等教育だったとする者もいるが、旧制の高等学校は、通常は(旧制)専門学校とともに一括して高等専門学校と称され、中等学校と考えられてはいなかったからである。

わたくしが高等学校の学校史・記念誌類の収集を思いついたのは、誰もが経験しているのであたかもよく知られているかに思われている高等学校教育に関する事実を調べたからである。昨今の研究者には想像できないかも知れないが、高校進学率が90%を超えるに至ってようやく困難な問題が自覚されはじめたいまから

僅か30年ほど前には、高等学校の教育に関する研究はなお皆無に等しい状況だった。どんな研究でもそうだが、まず、問題の事実を確認することからはじめなくてはならない。その手がかりを得るべくわたくしが始めたしごとの一つが高等学校の学校史・記念誌類を収集することであった。

こうして収集した資料から豊富な事実を知ることができる。一つだけ例をあげると、たとえば、旧制中等学校の教育実態の基本的枠組みである学科課程表(今日の教育課程表に当たる)は、文部省の認可事項であり、公立校の場合は設置主体の府県等の規則として公示されていたから、府県や国の公文書館などで調べることができる。しかし戦後は、教育の地方分権が徹底した結果、各学校の教育課程表は教育委員会への届け出文書に過ぎなくなったため、公文書として役所には残されていない。当該学校の毎年の『学校要覧』などから調べるしかないが、その『学校要覧』が残されている場合も少ない。(ここには、戦後教育史の基本史料をどう保存するかというより重要な問題があるのだが、論点が拡張されるのでこれ以上触れない。)となると、研究者が教育課程の変遷を知ろうとするなら、その学校史誌の記述に頼るしかない。わたくしはこうした方法で調べたのだが、1948年に高等学校が発足した最初の年度の教育課程表を記載したものは、千数百冊も集めた『学校史』『記念誌』の中にほんの二、三冊しかなかった。逆にいえば、たくさん集めて丁寧に調べれば何冊かはあるということである。

ところで、この「コレクション」を「中等学校史誌コレクション」と称することには一つの難点もある。戦後の(いわゆる新制)中学校の学校史・記念誌を含んでいないからである。これについては、若干の説明が必要である。(以下の記述では「(いわゆる新制の)」を省略する。)

中学校の教育は義務教育の課程とされているために、小学校と一括して議論されることが多い。このために、中学校の教育が中等教育の前期課程であることを軽視する向きが少なくない。わたくしがこの「コレクション」の収集を思いついた際に、このことに気づかなかったわけではない。中学校の学校史・記念誌を収集の対象から除外した直接の理由は、当時のわたくしの関心が高等学校にあったからに過ぎない。もう一つの理由は、事情をよく知らないままに、わたくしに躊躇があったことである。

ある資料の収集を始めるについては、大げさにいえば、いつくかの覚悟がいる。その収蔵場所をどうするかも大きな問題の一つである。高等学校の学校史・誌の場合に限っても、同じ学校が30年史、50年史という具合に何冊もまとめている場合がある。わたくしが収集を始めた当時の高等学校の数は5千を超えていたから、徹底して集めたらどれだけになるか予想ができなかった。取り敢えず高等学校の学校史・誌に限ろうと考えた主要な理由であった。まして1万2千校弱に達する中学校の学校史・記念誌をも収集しようと思ったらどういうことになるか予想ができなかったから、そこに躊躇があった。

これは杞憂であった。中学校の学校史・記念誌は、高等学校の場合に較べると、驚くほど少ないことがわかったからである。一例をあげる。東京都教育史の編纂を前提に東京都立教育研究所がかなり努力して収集した小・中・高の各級の学校史・記念誌リストを見ると、高等学校の学校史・記念誌は、わたくしが調べた1999年当時503冊あったが、学校数をはるかに多い中学校のそれはわずか226冊に過ぎなかった。こうした状況は、東京都に限ったことではない。本稿は中学校の学校史・記念誌が少ない理由を探索する場ではないので触れないが、「中等学校史誌コレクション」を標榜する以上は心すべき問題であることを指摘しておく。

さいごに、「中等学校史誌コレクション」が成り立ち、また必要とされる背景について一言する。実は、本来収蔵されていて然るべき国立国会図書館には、中学校、高等学校の学校史・記念誌は極めて少ないのである。なぜ少ないか。

納本することが義務づけられているはずなのに罰則がないため、せっかく努力して編纂された各級の学校史・記念誌は、希に分厚い立派なものができる国立国会図書館に納本されるが、多くの場合は同窓生などの関係者に配布されるにとどまっている場合が多いからであると考えられる。この事情はしばらく続くと考えなくてはならない。いうまでもなく学校史・記念誌の編纂・刊行は今後とも続くであろうが、それらが、いつ、どこの学校で発行されるかはわからない。そこに、これらの収集を継続する困難さがある。いっそうの充実を期待したい。

(ささき・すすむ 本学名誉教授)

来春、演習室（4階）が 情報メディア教育センター サテライトラボとして生まれ変わります！

すでに工事中のため、来年1月末まで閉室のお知らせをしております演習室は、情報メディア教育センターが学内11ヶ所に設置するサテライトラボの一つとして生まれ変わります。講師用1台、利用者用21台のPCを配置して、主に学生用（情報メディア教育センターのユーザーIDを持つ方）に利用していただくことができるようになります。通常は室を開放して自由に使用していただき、17時以降や土・日、祝日にはカードリーダーによる入退室管理を行う予定です。

また、20人程度のPCを利用した講習会なども予約制で受け付け、個人やグループでご活用いただきたいと考えております。開室が近づきましたら、利用方法などを改めてお知らせします。

なお、同じく情報メディア教育センターに無線LAN（20台まで）、情報コンセント（14口）経由で接続できる2階PCコーナーは従前通り利用できます。